共存コレクション！
那珂川紫苑
表紙イラスト
れいちゃん

序章　発起・提督着任

深海棲艦が現れてから数十年が経過しているが、それでもまだ深海棲艦との戦いは終わりが見えることがない。それどころか、極東に存在する鎮守府だったりは悪化しているところまであると聞く。艦娘もそれに対抗できるように強化されていたのだが、昨今では、いずれ終末を迎えるこの戦いの後に、人間として生きていけるようにするような試みが見られている。ただ、その試みはほとんどが公開されておらず、秘密裏に行われ、その試みのために建造された艦娘はほんの僅かだという。

その艦娘の試験運用をすると言うようなことで、俺、日下朱里（ひかべあかり）は、海軍本部が存在する本島から離れたところにある比較的深海棲艦の襲撃が少ない鎮守府に着任することになった。

なんで俺が選ばれたかは分からないが、とにかく昔にお世話になった総督からの直々の命令だったので断るに断れなかった。

総督とは俺が軍に入る前から習い事として、護身術をやっていたときに知り合って、なにかとよくしてくれた。総督は、この任務を任せる際に、

『護身用に持っていけ』

と言って、俺に対深海棲艦用ナイフを授けてくれた。

そんなこんなで、流れるようにスムーズに話が進んで、試験運用のための任務を果たすために鎮守府のある島へと上陸した。

ただ、俺自身はそんなに艦娘については詳しくない。着任する前にうわさや文献での知識程度しか備えていない。深海棲艦については、義務教育の中でどういったものかということを習っているので、艦娘よりかは知っている。

艦娘についての知識が乏しい俺でも大丈夫なのかなと思いつつも、とりあえず俺は、指定されたところへと向かう。

「あれが」

鎮守府の門が見えてきたあたりで俺はそう呟く。

鎮守府の門の前まで着いた俺は、軍のほうから『試験運用対象の艦娘一人をそちらに向かわせる』と言われていたので、周囲を見渡して、もう来ていないかを探してみる。

艦娘は、昔の戦艦や空母、巡洋艦、駆逐艦などをもとに作られた人型の深海棲艦に対抗できる兵器だと言われている。一体どんな屈強な姿なのか、今から男のロマンが刺激させられている。

しばらく門の前で待っていると、来た道のほうから一人の中学生か小学生くらいの女の子がやってきた。俺は、ここに来る際に港町があったから、そこから来た子なのかなと思ってしまい、その女の子が俺のところまで来たので、

「ちょっとごめん、君。ここは子供が来ていい場所じゃないよ」

そう声をかけた。すると女の子はこちらの顔を覗き込んできて

「電は、ただの子供じゃないのです、それにこちらには辞令でやってきました」
そう返された。
女の子は、自らを電と名乗った。その電と名乗る女の子は、ただの子供ではなく、辞令でここに来たという。それってつまり、この子が艦娘ということだろうか。
いやいや、まさかそんなことはないだろ。嫌、けれども万が一にそれがあったとしたら、いけないので、俺は女の子に確認の意味を込めて。
「えっと、辞令ってことは本部から来た艦娘ってことであってる?」
そう聞いてみた。すると、女の子は、
「そうです、本日付でこちらに着任することになりました、暁型駆逐艦四番艦の電です、それで、そのことを知っているということは、貴方がここに一緒に着任するという司令官さんですか」

自分は艦娘だと答え、俺がここに着任予定の司令官だと聞いてきた。俺は、予想だにしない現実に驚いた。

「えっと、どうかなされましたか？」

電は、こちらの顔をじっと見て聞いてくる。

「いや、あまりにも信じ難い現実を直視してしまって、ああ、そうそう、さっきの質問だけど、そう、俺が今日からここに着任する提督の日下朱里だ」

話しながら頭の中を整理しつつ、先ほどの電の質問に返答する。ずっと頭の整理をしているのだが、まったくと言っていいほど整理がつかない。そんな俺を見てか、電も少々戸惑いを見せながら

「そ、そうですか、とりあえずここで話すのもなんですし、一旦中に入りませんか」

そう聞いてきたので、頷き、とにかく鎮守府の門をくぐり、最初に見えてきた大

きなレンガ造りで三階建てくらいの建物の中に入ることにした。
建物に入ると、最初に見えてきたのが、ちょっとした豪邸にあるような広いエントランスであった。
「エントランスでこんな広いのか」
俺は、エントランスを見てそう声をこぼした。
「前に少しだけほかの鎮守府を見たことがありますが、ここは少しほかのところより広いように感じます」
電が、エントランスの感想として、ほかの鎮守府との比較を添える。
「そうなのか、そんないいところを俺が提督でいいのか」
俺が海軍に入れたのもここ二年くらいの話だ。中学を卒業して、総督とのつながりもあり、そのまま海軍に誘われて入っただけのこんな俺でいいのかと不安が大きくなった。元から不安がなかったわけではない、ただ、立派な建物を見てからその

不安がさらに大きくなっているのだ。

「待ってたわ、日下提督、そして電さん」

エントランスの奥のほうから、声から色香を漂わせる少し低めの女声が聞こえてきた。

俺たちは、二人で声のする方を見ると、そこには赤に少し寄っている桃色のような髪型をした、俺より少し身長の高い女性がいた。

「ようこそ、ここの鎮守府へ」

女性は明るい声で俺たちを歓迎してくれているようだ。

「ああ、自己紹介がまだでしたね、私は本営からあなた達のサポートを任された明石です」

女性は明石と名乗り、頭を下げる。

「本営からってことは、総督からなにか？」

「ええ、その通り、総督曰く『心配だから定期的に見守ってやれ』とのことで」
「心配なら任せなきゃいいのにとは言ってはいけない奴か」
「察しが早くて助かるわ」
そんな風に任務と総督に対する言葉を交わす。
「本営の意向とかそういったことは後に回して、今は執務室に案内するわ」
そう言われて、俺たちは明石についていく。
エントランスの中央にある半円を描くような左右に設置されていた階段の左のほうを上り、上り切ったところで、左側へと向かって行く。階段があったのはいいけれど、左右どちらとも登れば一つの廊下でつながっているので、分ける必要があったのかはいささか疑問だが。
階段を上がって左に曲がった俺たちは、そのままま っすぐと進んでいき、一番奥の部屋に案内された。

「ここが執務室よ、まあ入りましょうか」

そう言って、明石は執務室の扉を開ける、

執務室に入り最初に見たのは、部屋の隅っこにある二つ積んであるダンボールと、一つの布団だけだった。本当に見事なほどそれ以外はさっぱりと本棚や食器棚のような棚というものから机や椅子もなかった。

「これはどういう……」

俺はまた頭の中が真っ白になりかけた。目の前のことが一瞬理解できなかった。

「これはすごいですね」

電も同じだったようでそう感想を漏らす。

「ああ、これはその総督が鎮守府に対するそのこうした支援を発注し忘れていたみたいで、急遽昨日なんとかならないかと思ったところに、ダンボールがあって布団も余ってたみたいだからそれを送ったらしいわ」

「なにを考えてるんだあの人は」
「まあ、そんな気に病むことじゃないわ、どうせすぐに物資として机とか届くだろうから」
「それまではあのダンボールで執務をしろってことなんだよな」
「まあそうなるわね」
あまりにも総督の適当さに呆れてしまった。
「ダンボールのこともそうだが、布団が一つしかないのも気になるんだが、まさかあれは一つだけなのか」
俺はダンボールよりも布団が一つしかなかったことに深く突っ込んでしまった。
「それは何というか、まあ察して」
「いや、もう言われる前から分かってたけどさ！」
これはどのようにしたらいいのだろうか、一つしかないとなると俺か電のどちら

かが寝るとき大変になってしまう。いや、それについては俺が床で寝ればいいだけの話だからいいんだが、それにしてもさすがに二人着任するって知っててこれはひどいだろ。

「あー、もうなんだ、あの人は相変わらずだな」

総督がなんか変なところで抜けていたり、適当だったりすることは知っていたが、ここまで生活に支障が出そうな感じで仕掛けてくるとは思わなかった。

「まあうん、ならしょうがないか、あの布団は電が使ってくれ」

俺は、電に布団を使うように言った。

「そ、それは何といいますか、上に知られたらダメな気がするのです、なので司令官さんが使ってください」

電は、そう言って俺が言ったことを却下した。

「電さん、ちょっといい？」

明石が電を呼んで執務室の隅っこに行って何やら小声で言っている。いったい何を言っているのかは大方予想ができる。おそらくは、俺が男で、男としてのプライドで見栄を張りたいから、普通に可愛い電にいい顔をしたいという下心を抑えるために遠回りにあんな風に言っているだけとかそんなところだろう。

確かに俺はそういうことも考えていた、というか八割ほどはそういう思考だった。だって俺だって男で、少しでも女の子からいい人と思われたいって思ってしまうんだ、男ならわかってくれるはずだ。それに、電を見たときすごく可愛い女の子だと思ったし、明石もすごくきれいでなんというか素敵な女性にも見えたから、そう言った女性に囲まれたらいい顔をしたくなるのは仕方ないと思う。

戻ってきた電と明石は、

「それでもやっぱり電が使うのはおかしいと思うのです」

「まあまあ、それなら一緒に使えばいいんじゃない」

そんなことを言っていた。

「一緒に、さすがにそれは」

俺は「だめだろう」という前に明石に口をふさがれてしまった。

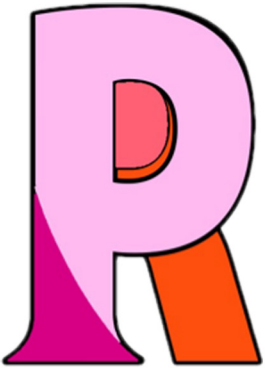
「まあ、そこは二人で決めて」

明石は投げやりにそう言う。

こうして俺の提督としての日々が始まった。

結局ベッドについては、互いが折れなかったため仕方なく二人で一つの布団を使うことになった。

那珂川文庫



人間と共存するためにと開発された新型の艦娘の運用試験のために司令官となった日下朱里と電。

これからお世話になる島の港町の方々に挨拶をしようと港町のほうへ寄ってみると妙に物静かだった。

これはなにかおかしいと思い調査を始める朱里鎮守府一行。

調査を進めていくと、むごく破壊されたところを見かけて、ついには、その違和感の正体を見つける。

那珂川紫苑がpixivで週間投稿をしていた二次創作作品の大改稿作品、ここからまた新たな朱里と電たちの物語が紡がれる！